

重症心身障害病棟での骨折予防を目的とした行動変容を目指して

～骨折事例に焦点を当てた KYT 学習会を通して～

岡本千絵¹⁾ 上田幸¹⁾ 上山純奈¹⁾ 田中舞¹⁾ 末永佑香¹⁾ 花房人美¹⁾

1) 鳥取医療センター看護部 3 病棟

要旨

危険予知トレーニング（以下 KYT）とは危険への感受性を磨く気づきの訓練である。重症心身障害児(者)は運動量が少なく、幼少時からの骨の形成不全があり骨塩量も少なく骨折しやすい。前年度当病棟でも1件骨折事例が発生した。骨折を予防し患者へのケアを安全に行うことが看護師には求められる。先行研究では KYT 学習会前後で安全意識の向上が明らかにされている。本研究では KYT 基礎ラウンド法の第1ラウンド(現状把握)、第2ラウンド(本質追究)、第3ラウンド(対策樹立)、第4ラウンド(目標設定)までの KYT 学習会を実施し、KYT 学習会前後で骨折予防に向けた病棟看護師の行動に変化がみられたので報告する。鳥取臨床科学 14(1, 2), 65-72, 2025

Key Word

重症心身障害児(者)、骨折予防、KYT(危険予知トレーニング)

はじめに

危険予知トレーニングとは、杉山¹⁾は「まだ起きていないエラーや事故の可能性を察知し、事前に防止する手立てを講じる能力を身につけることにあります。」と述べている。KYTを行うことで、予防策の立案や実際に起こった時に素早く対応できる能力が身につく。また、危険を予知することは危険の発生を未然に防止していくことであるため、KYT は予測と予防による未然防止対策といえる。

A 病院 B 病棟は重症心身障害病棟で、現在 46 名の患者が入院しており、そのうち 45 名の患者が自力での体位変換が困難である。理学療法士と共に全患者の骨折予防カンファレンスを行い、看護計画を立案してケアを実施していたが、前年度骨折事例が 1 件発生した。

重症心身障害児(者)は運動量が少なく、幼少時からの骨の形成不全があり、骨塩量も少なく骨折しやすい。さらに年々加齢の要素が加わるため、いっそう骨折のリスクが高くなっている。脳性麻痺などの疾患や長期臥床により全身の拘縮や変形も多い。前年

度の骨折、外傷発生場面には、「入浴」「更衣」「おむつ交換」「移乗」などの日常生活支援の場面で過度の外力や緊張の高まりによるものが多い。そのため、気づかないうちに骨折が発生することもあり、看護師個々の安全に対する高い意識が必要となる。

衣笠²⁾の先行研究では、看護師を対象に KYT 基礎ラウンド法の第1ラウンド(現状把握)と第2ラウンド(本質追究)までの KYT の学習会を実施した。KYT 学習会後「患者安全のための看護実践自己評価尺度-病棟看護師用-」³⁾を用いて意識調査を行い、KYT 学習会前後で安全意識の向上が明らかにされている。

そこで本研究では、前年度に A 病院 B 病棟で実際に発生した骨折事例のインシデント報告をもとに作成した事例を用いて、KYT 基礎ラウンド法の第1ラウンド(現状把握)、第2ラウンド(本質追究)、第3ラウンド(対策樹立)、第4ラウンド(目標設定)までの KYT 学習会を実施し、KYT 学習会前後で骨折予防に向けた病棟看護師の行動が、どのように変化したのか傾向を分析した。